

重かさねて 楓橋ふうきょうに宿しゆくす

張ちやう

繼けい

白髪はくはつ重かさねて来きえる 一夢いちむの中うち

青山せいざん改あらたまうず 旧時きゆうじの容すがた

鳥啼からすねき月落つきおちつ 寒山かんざん寺じ

枕まくらを欵そぼだてて 猶なほ聴おきく 半夜はんやの鐘かね

【作者】張 繼(生没年不詳) 中唐の詩人。字は懿孫(いそん)、湖北省襄州(じょうしゅう)に生まれた。七五三年の進士。地方官より中央の檢校(けんこう) (けんこう) 祠部(しほ) 郎中(ろうちゆう)に至る。張祠部(ちようしほ) 詩集一卷あり。『楓橋夜泊』の詩は内外に愛誦される。清の学者俞越(ゆえつ)の書いた石碑が寒山寺にある。

【語釈】\*楓橋…江蘇省蘇州の西にあり南北往來の要路。 \*白髪…しらが頭 \*青山…樹木が青々と茂つた山。故郷の山。

\*舊時…昔。以前。往時。 \*寒山寺…蘇州の西郊楓橋の近くにある寺。唐の詩僧寒山が住んだことから名づけられた。

\*半夜…よなか。夜半。中夜に同じ。

【通釈】しらが頭になつてふたたびこの地を訪れたが、実に夢の中にいるような心地がする。まわりの山々は変わり無く昔のままの姿である。鳥が啼きながら寝ぐらに急ぎ冴えた月が水の面に映るころ、寒山寺から打ち出す夜半の鐘の響きを枕を傾けてしんみりと聴きいつたのである。

